第59回国語分科会国語課題小委員会（Web開催）・議事録

令和 ５ 年　６ 月 ３０日（金）
１５時 ００分 ～ １６時 ５０分
文部科学省５階５Ｆ６会議室

〔出席者〕
（委員）森山主査、滝浦副主査、川瀬、川辺、木村、齋藤、佐藤、中江、長岡、
成川、古田、村上、山本（真）、山本（玲）各委員（計14名）
（文部科学省・文化庁）圓入国語課長、武田主任国語調査官、
鈴木国語調査官、町田国語調査官ほか関係官
※ 森山主査と事務局は、文部科学省５Ｆ６会議室にて参加。

〔配布資料〕
１　文化審議会国語分科会国語課題小委員会（第58回）議事録（案）
２　教育現場と連携して実施したローマ字に関する実践的研究の概要（山本玲子委員提出）
３　外来語の表記に関する実態調査の概要（案）

〔参考資料〕
１　ローマ字のつづり方（昭和29年内閣告示第１号）
２　国語分科会漢字小委員会への提供資料（独立行政法人国立国語研究所）
（平成20年9月22日 漢字小委員会 資料4）
３　国語課題小委員会（23期）における審議の内容

〔経過概要〕
１ 事務局から配布資料の確認があった。
２ 前回の議事録（案）が確認された。
３ 山本（玲）委員から、配布資料２「教育現場と連携して実施したローマ字に関する実践的研究の概要（山本玲子委員提出）」について説明があり、説明に対する質疑応答及び意見交換が行われた。
４　事務局から、配布資料３「外来語の表記に関する実態調査の概要（案）」及び参考資料２「国語分科会漢字小委員会への提供資料（独立行政法人国立国語研究所）（平成20年9月22日 漢字小委員会 資料4）」について説明があり、説明に対する質疑応答及び意見交換が行われた。
５ 次回の国語課題小委員会について、令和５年７月21日（金）午後３時から５時まで、オンラインで開催する予定であることが確認された。
６ 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○森山主査
定刻になりましたので、ただ今から第59回、今期２回目の国語課題小委員会を開会いたします。今回もオンライン上でのウェブ会議となりましたが、よろしくお願いいたします。

本日は議事次第のとおり、（１）ローマ字のつづり方に関する検討、（２）今後取り組むべき課題全般に関する調査等、（３）その他という内容で協議を行いたいと考えております。事前に資料を御覧になっているとおり、本日は山本（玲）委員にお願いし、英語教育の観点からローマ字に関するヒアリングを実施することとしています。また、国語分科会として今後取り組むべき様々な課題と関連して、事務局で実施を検討している調査等についても意見交換をしていただく予定です。

それではヒアリングに入りたいと思います。本日は山本（玲）委員にお話を準備していただきました。山本（玲）委員は英語・英語教育を専門となさっており、初等中等教育の現場での経験もおありです。ローマ字の問題に関しては以前から取り組んでいらっしゃって、国語科でいわゆる訓令式を学ぶことを尊重しつつ、外国語科でヘボン式に改めて出会うという現状において、児童生徒がどうしたら混乱なく学ぶことができるかを実践的に研究なさってきたと伺っております。その辺りも含めて是非御知見を賜りたいと思います。

本日は学校教育におけるローマ字、主に小学校における外国語科と国語科との関係などが話題の中心となります。ただし、これまでも繰り返し確認されてきたことではありますが、文化審議会国語分科会は学校教育の在り方や教育課程の内容について検討する場ではありません。今期新たに加わっていただいた委員の皆様にも、この点については御理解いただけると有り難く存じます。

とはいえ、社会全体における国語課題、殊にローマ字について考える上では、学校教育における現状を知っておくことは欠かせないことでもあります。本日のヒアリングについても、社会全体の国語課題としてローマ字の問題を考えていく上で、踏まえておくべき実情の一つを捉えるという趣旨でお話を伺い、意見交換をしていきたいと思います。

山本（玲）委員からは配布資料２「教育現場と連携して実施したローマ字に関する実践的研究の概要（山本玲子委員提出）」をお預かりしています。こちらを御覧になりながらお話を聞いていただきたいと思います。それではよろしくお願いいたします。

○山本（玲）委員

よろしくお願いします。今日はこのような時間を取っていただきありがとうございます。お手元にある資料と同じものですが、画面共有をいたします。

今、紹介していただいたとおりで、私の背景について前回の国語課題小委員会の自己紹介でも申しましたが、20 年間程度小中学校の教壇に立つ中で、国語科と英語科両方の経験があり、また小中一貫校での勤務経験などから、小中連携あるいは国語・英語連携に携わることが多い立場でした。大学の教員になってからも現場と密接に研究をする機会に恵まれたことから、英語の専門家ばかりで研究をしていてもらちが明かないジャンルであると気付き、音声研究者や国語研究者の方々と次々に共同研究をお願いして、私自身も国語学についても学びながら一緒に歩んできた数年間であったという背景を持っています。

本日の流れとしては、五つに分けています。まず、外国語教育におけるローマ字の扱い、特にＩＣＴが学校現場に入ってきていることから、キーボード入力におけるローマ字を含む点です。２番目は現状における課題、３番目が現場の先生方や児童の意識調査、４番目がヘボン式は訓令式に比べて複雑でルールもばらばらである問題についてです。最後に、国語科と英語科、訓令式とヘボン式がどのように連携していけるのかという提案をさせていただきたく思います。

最初の点です。現在小学校３年生では国語科で訓令式ローマ字が導入されることが

決まっていて、同じ小３で外国語活動が始まり、ヘボン式ローマ字に出会うというタイミングになっています。小学校では５・６年生で英語が教科化されていて、そこではヘボン式ローマ字が使われています。

機器上の入力の仕方は、御存じのようにコロナ禍の中でＧＩＧＡスクール構想が一気に前に進み始めて、多くの学校で小１からタブレットが配布されてきています。タブレットでローマ字入力を教える時期は小学校によって異なっています。今ここに映っているようなキーボード用の入力表を持たせて、見ながら打ちなさいという指導をしている学校が多いようです。

最初のうちは先ほどのようなローマ字表を見せるのですが、そのうち自己流で入力させるようになることが多いようです。実際に聞き取り調査をした小学校の先生の声としては、コンピューターやタブレットの使用に関しては、訓令式で打とうがヘボン式で打とうが変換されるので、打ちやすいように打てばよいと指導しているということでした。

私も幾つかタブレットを使った授業を観察させていただきましたが、子供たちの手元をのぞき込むと、例えば「チェック」という言葉を入力するときに、表のとおりにローマ字入力をしている子もいれば、「チェ」を「tile」のような自由な方法で入力している子もいました。「ｌ」がなぜ入るかというと、御存じのように、「ｌ」の後ろに「ａ・ｉ・ｕ・ｅ・ｏ」を付けると小さい「ァ・ィ・ゥ・ェ・ォ」になるからです。これが、中学校に入って英語のつづり方を習うようになっても、まだ「チェック」と書くときなどに「ｌ」が現れるという報告を中学校の英語の先生から受けたこともあります。

続いて、国語と英語の関係というところでお話しします。先ほど言ったように小３の国語科で訓令式、小５から英語科でヘボン式を子供たちは学びます。

特に訓令式の指導でよく使われている市販のドリルでは、実際には余り使わないような「enpitu」「kesigomu」「Onaka ga suita.」といった日本語の言葉を訓令式ローマ字で書いたものをなぞったり、写したりするようなことが多いです。授業中にはやらずに、ドリルを夏休みの宿題とするという学校もありました。

児童からは、なぜ訓令式とヘボン式があるのか、英語の時間と国語の時間のローマ字が違うのかという質問が出るのですが、指導する側の先生方もその理由を知らない場合があります。その質問が出るのが怖いと言う先生もいました。

ここで整理しますと、小学校で英語が導入されるようになる以前は、小学校４年生で訓令式指導が始まっていて、小学校を卒業して中学校に入って初めて英語に出会い、そこでヘボン式ローマ字を使うという時代が長く続いていました。私が中学校の教壇に立っていたのはこの時期でした。中学校に入って子供たちにまず自分の名前をヘボン式で書いてくださいと言った時点で、生徒に戸惑いがありました。実際、私自身がこの分野で研究を始めたきっかけはこの時に苦労した体験であったと言えると思います。ただ、これはほとんど知られていなかったことだと思います。中学校の英語科の教員だけが感じることがあって、世間一般では余り知られていなかった問題ではありました。

その後、制度が変わっていき、まず国語で訓令式を教えるのが１年間早くなり、2012年に小学校３年生からになりました。その理由として、ＩＣＴ教育が進んでいくので、早めにローマ字を習った方がいいだろうということもあったと思います。

ちょうどその時に小学校高学年で英語（外国語活動）が始まりました。今まで中学校

の英語科教員だけが知っていたローマ字の問題について、ここで小学校５年生を担当する先生方の中に、教えにくいなと気付く人が出てきたのではないかと思います。小学校の先生はいろいろな教科を教え、しかも毎年担当する学年や教科は変わります。つまり、2012 年のこの時、日本中の小学校の先生の間でこの問題が共有されていったターニングポイントになった面があったと思います。

そして現在の状況です。2020 年以降、小学校の英語（外国語活動）の開始は更に低年齢化し、３年生からとなったことで、同じタイミングで両方のローマ字に出会うことになりました。小学校の先生から聞いた話では、小３は今まで小１・小２でやっていた生活科という科目が理科と社会に分かれ、子供への負荷が高くなる面があるようです。こういう時に、２種類のローマ字つづりが入ってきたことで、先生方も子供たちも負荷を感じているという話を聞きます。

これは私が最近実際に見せていただいた小学校３年生の授業です。小学校３年生と４年生の英語活動は教科ではないので、検定教科書ではなく、文部科学省が作った教材「Let’s Try!」が全小学校で配られ、これを使って指導しています。このユニット６に、自分の名前の頭文字のカードを友達と交換しようというタスクが載っています。アルファベットカードが付いていて、はさみで切り取って使うようになっています。私が見せていただいた授業では、先生がアルファベットカードを持っていて、それを子供たちに渡していき、その後、お友達と頭文字のカードを見せ合おうという活動をされていました。

その時に先生が「これから一人ずつ頭文字を教えてくれたら、そのカードを上げますよ。」と言って配って回っていました。最初の子供に「What is your first letter?」と聞くと、例えば山本さんという名前の子が「Ｙ」と答えて、「Here you are.」と言ってＹのカードを山本さんに渡します。以下、それぞれの子供たちに頭文字のカードを渡していき、福田さんという名前の子が聞かれたとき「Ｈ」と訓令式で答えました。その先生は担任の先生なのか、それとも英語専科の先生で、国語で訓令式を習っていることを知らなかったのか、私には分からなかったのですが、先生は「訓令式ではＨだけれど」といった説明は一切せず、「福田さんの「ふ」だから「Ｆ」だよ」といったように、さらっと流してＦのカードを渡し、次の子供たちのところへ行ってしまわれたんです。私は後ろでその教室を見ていて、その女の子を観察していました。その子は何も言いませんでしたが、納得のいかない表情をしていたようにも見えました。私がたまたま参観に行った教室で実際にそれを見たのですが、同様のことがあるということは、小学校の先生方からも聞いています。

次に、先生方や児童、保護者の意識調査の結果です。全ては読み上げないので、配布資料を見ていただければと思いますが、最初の中学校の先生のように、小学校で習った訓令式ローマ字は忘れなさいというところから始まるという体験をしたことは私にもあります。先ほどの福田さんのことも、自分の名前が違っている、変えられるというのは、大人にとってもそうですが、子供たちにとって衝撃的です。そういったメンタル面のフォローにまで追われるといったことを聞くこともあります。

次のところです。訓令式では伸ばす音の上に三角のかぎのような記号（ˆ）を付けるのですが、外国語科で出会うヘボン式は、英語の音がそもそも伸ばす音／伸ばさない音という区別をしない言語なので、記号を付けません。例えば「ゆうき」という名前の男の子にｕの上に記号を付けないんだよと教えても、一度訓令式で記号を付けると習

っている子供を納得させるのにとても時間が掛かります。また、本人が納得してくれても、その子が記号のない「Yuki」とつづるたびに「ゆき」と読めるので、「女の子の名前だ」と言って周囲にからかわれるケースがあるということを教えてくれた先生もいました。

御家庭によっては、保護者の中には訓令式を使わないように指導する場合があって、お子さんが国語の時間に訓令式で書きなさいと言っているのにヘボン式で書いてしまう。それを注意すると、お母さんに怒られてしまうから、と言われたといった例も聞いています。保護者自身に意識調査をしたわけではありませんが、保護者が混乱していたり、少し不信感を感じたりしているように見えることもあります。

同様の例として、次の冬休みの宿題ドリルの話があります。小学校ではドリルの採点を保護者がすることもよくあるのですが、国語のドリルなのにヘボン式を基準に採点した保護者が、模範解答が間違っていると言ってくるような場合があったという話です。

そもそも、先ほど言ったように、「鉛筆」や「消しゴム」を訓令式で書くことは実生活では一度もないという人もいます。何の意味があるのかと児童や保護者が感じているのが現実です。これからは伝えたい相手を想定した学習活動につなげていくべきだという声が若い先生たちからも聞かれます。

次に、４番目のヘボン式は難しいのではないかという問題に関してお話しします。小中学校の先生方に、どのような教材が欲しいかといった要望を聞き取りました。すると、まず、そもそもローマ字は何のために指導するのか、なぜつづり方が２種類あるのか、そしてなぜ国語と英語では違うものを教えることになっているのか、これを知りたいという声がとても多かったのです。

訓令式は、初めに来る文字の後ろにａ・ｉ・ｕ・ｅ・ｏを付ければできるので、とても教えやすい。しかし、ヘボン式のルールは教科書によって違っているなど、複雑なところがあります。例えば、京都には丹波町という地名がありますが、「タンバ」のように、「ン」の後に、上と下の唇が付く音が来るときには、「ン」を「ｎ」ではなく「ｍ」と書くといったルールもあり、そこまで小学生に教える自信がないというような先生の声も聞きました。

これらの要望調査を踏まえて私は、指導者がと言うか、全ての大人が不安なくヘボン式ローマ字を子供たちに使わせることができる、そういう教材開発を目指しました。

このページの一番下に書いてある発音記号の話に少し触れます。私は現在、音声学の研究の延長線上で、発音記号指導用の教材開発の研究をしています。調べてみると教科書によって発音記号の表記が違うんです。参考書や辞書、英和辞典に載っている発音記号も会社によって異なっています。その理由は、そもそも世界基準で決められている発音記号がとても複雑だからです。僅かな音の違いも全て表せるようにできているため、日本の英語学習者が覚えるには、たとえ大人であっても世界基準の発音記号は難解過ぎます。

そのため、たまに英語の辞書を引くといった人たちが使いやすいように、簡易版の発音記号を作ることはあっていいことだ、許容範囲のことだ、と思っている研究者も多くいます。会社によって辞書の発音記号をどの程度簡易にしているか、少しずつ違っていて、これはもう広く受け入れられているし、それを直す必要があるという声も特に上がっていないと理解しています。

これはローマ字も全く同じだと私は思います。先ほどの、タンバの「ン」を「ｍ」にしないといけないかどうかということはレベルの高いヘボン式のルールであって、別にタンバの「ン」を「ｎ」で表記したからといって困らないし、間違った発音になるわけでもありません。そういった辺りは簡易版では削除しても全く問題ないと思っています。そういった、ある意味で柔軟性と言いますか、曖昧さに対して許容範囲を広げていくことが、現実で外国語を日本の中で少しでも便利に使えるよう、汎用性を高めていく中では必要なことだと考えております。

次に、小学校の指導者を中心に整理します。「小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ」という書籍の中でローマ字という章を担当したときに、国語研究者である小林先生とタッグを組んで書かせていただいた説明文です。

まず、ヘボン式は海外の方との交流のために作られたものであること、訓令式は、ローマ字を国字とするという議論から生まれ、日本人の、日本人による、日本人のための文字を作るということで、元々存在していたローマ字つづりをより平易なルールに落とし込んで作ったものであることを明記し、整理しました。この二つは明らかに目的が異なります。問題なのは、それを指導する小学校の先生や児童生徒たちがそのことを知らないままに、二つのローマ字を覚えているということであると分析しました。そこで、まずこの二つの違いを明示的に教える必要があると考えました。

そのために作り出したのがアニメのようなキャラクターです。幕末に来日し、ヘボン式を作った James Curtis Hepburn の似顔絵を基に「ヘボンさん」というキャラクターを作り、このキャラクターが今までのいきさつを説明してくれます。この教材を使えば先生が説明する必要はありません。また、初めに、五十音の規則性を教えるために訓令式がうってつけであること、タ行はｔで始まり、ａ・ｉ・ｕ・ｅ・ｏという母音がその後ろに来るのが日本語の五十音であることをまずここでしっかり教えます。

日本語の音は日本の子供であれば分かっていて当たり前と思いがちですが、意外とそうではありません。小学校の先生が言うには、小学校で五十音を習ったときに初めて正しく日本語が発音できるようになる子供が結構いるらしいです。聞こえた音を出しているつもりで、正しく言っていなかった子供も少なからずいるかもしれないということです。しかし、国語の時間に五十音をそこまで丁寧に、口の動かし方まで含めて音声学的に教えているかどうかは先生によって多分違うと思います。そういう意味でも訓令式を日本の音の特徴を教えるのに使うと非常に効果があると考えています。

このキャラクターがその後、訓令式に関して、日本語の音を伸ばしていくとアイウエオの音で全部終わるよねといった特徴を説明します。その流れから、伸ばす音を訓令式で書くときは記号を付けてね、でも外国の人には分からない記号だから気を付けてねと言います。なぜなら、英語圏の人が発音するときに例えば Tokyo というローマ字を見ると、トーの音もキョーの音も伸ばすというほど伸ばさないけれども、ト、キョほど短くもありません。「Tokyo」という日本語としては曖昧な音になり、英語の母語話者は逆に全く伸ばさないということができません。英語は伸ばすか伸ばさないかは曖昧な言語ですが、日本語はそれをとてもはっきりさせます。止めるべき音はしっかり止める、そういう言葉なんだという日本語への気付きも同時に得られることが期待されます。

次は、キーボードの説明についてです。これは先ほど私が説明した内容とほとんど同じなので読み上げませんが、小学３年生が読むことを念頭に易しい言葉で記述して

います。実際これを使ってくださった小学校の先生に聞くと、子供たちは大変熱心に読んで、腑に落ちていた様子で、「分かった、分かった。」と口々に言っていたという報告も受けております。

ここから先の検証や具体的な研究に関しては、専門的な英語教育のことを話す場ではないので簡単に説明します。実際に、先ほど開発した教材を使ったクラスと使っていないクラスを比較したところ、使ったクラスの方がローマ字の習得が有意に優れていたという結果が出ました。これはつまり、ヘボン式は難しいと思われていたが、適切な説明があれば―キャラクターが適切に説明してくれるといったサポートがあれば―訓令式に負けないどころか、訓令式を指導したクラスよりも習得できたということで、ヘボン式は難しいから無理だと諦めるのは妥当ではないという結果を得ることができました。

次が実際に使ったテストです。

さらに、幾つかの学校では国語科で実施した後、その流れで英語に流していくための連携授業を行ってもらい、その成果が報告されています。考えてみれば、国語・英語に限らず、例えば算数で「ｇ」や「ｍ」という文字が出てきていて、なぜそれは「グラム」などと読むのに英語や国語の時間では違うのかなど、子供たちは実はたくさん疑問を持っていたようです。それが教科横断的な学びにつながったというううれしい報告を小学校の先生から頂きました。

この教材は科学研究費助成事業（科研費）で作ったものですので、希望される先生や学校には無料でお配りしました。ある先生はこのように自分のブログの中に載せてくださっているなど、反響が大変大きく、うれしい思いをしたこともありました。

最後の提案です。国語科と英語科で実際にどのような順番で指導していけばいいのか教えてほしいという声がたくさん届きました。2020 年に山本・田縁でまとめたのがこの「音と文字の指導」という本です。赤で書いているところだけを説明いたします。まず、国語科の中でローマ字を使って②日本語の五十音の特徴を教える、その時に③ヘボン式の意味や成り立ちを説明し、その二つの成り立ちの違いについても触れる、その後、外国語科の授業で④⑤を行うというように順番をしっかり守るということです。つまり、国語科で教えるまでは英語科で先に教えることは待ってくださいという提案をさせていただきました。

この二つのことを私自身が実際に、小学３年生でなくて４年生を対象にして、授業を行いました。12 人ずつの子供たちで二つのグループを作りました。下のグループは普通の英語の授業です。フォニックスのカードというのは、「ａ」「ｂ」などと書いてあるカードを「ア」「ブ」と読みながら指導するもので、フォニックスは今小学校で一般的に行われている指導です。これを通常どおりに行ったのが、下の 12 人のクラスです。上の処置群は、先ほど言ったような訓令式を教えて、日本語の音も教えて、そしてヘボン式との違いを教えるという処置をしたクラスです。これはたった 10 分です。一方はそれを 10 分やっただけで、全く同じテストを事前、事後にどちらのクラスでも行いました。

そのテストは、このページの右下にあるもので、つづりが分からなくても問題ないものです。例えば１番は「hat」で、どちらかに丸を付けてくださいという、ｈとｆのどちらかを選ぶだけです。これはつづりを読ませるテストではなく、単語の中で最初の音がどちらの文字だと思ったかを選ばせる問題です。これを事前にもやり、事後に

もやって、幾つ合っていたかということを検証しました。

その結果が、僅か10分の指導時間でしたが、上の指導法の方が、有意に得点が高くなったという結果になりました。訓令式とヘボン式ローマ字を使って、日本語と英語の音はどう違うのかを明確に教えたクラスです。そのクラスがこの右下のテストで、たった10分の指導で点数が上がったという結果でした。

ちなみに、授業の中では左上に載っている表も使いました。皆さん、ハヒフヘホは全部ｈで書いてあるけれど、もしｆだったらどうなると思いますか、発音してみてくださいと言うと、子供たちが工夫しながら「ファ、フィ、フ、フェ、フォ」などと言って、「ｆは駄目だ。やっぱりローマ字はｈでないと駄目だね」といった声を子供たちから引き出します。次に、サシスセソはどうでしょう、ラリルレロはどうでしょうと順番にやっていきます。例えばラリルレロのとき、子供が「先生、ra、ri、ru、re、roとｒで言うより、ｌのla、li、lu、le、loの方が日本語のラリルレロに近いんじゃないですか。ローマ字はｌの方が良かったんじゃないですか」と言うんです。ああ、いいところに気付きましたねと思いました。そもそもどちらの文字であれ、日本語を全く同じ音で表すのは不可能です。だから昔の人がｌにしようと思ったら、ｌでローマ字を作っても良かったんです。ｌもｒも日本語のラリルレロとは違うから、どちらかを選ぶしかない、じゃあｒにしようかと多分なったんですよ、今でもｌの方が近いと思う人もきっといますよ、というように、ヘボン式も万能ではないし、日本語の音と全然違うんですよということを明示的に教えました。

子供たちは目をきらきらさせて聞いてくれて、なるほどなるほどという感じでした。子供たちにとって、そんなに難しいことではありません。何でもいいからとにかくｒで覚えなさいなどと言われるより納得のできる体験だったのではないかとも思っています。

結論として、このたった10分の指導を通して、子供たちは英語と日本語の音の違いをほぼ正しく認識できました。つまり、英語だけの指導をするよりも、英語の文字と音の関係をより理解できた可能性があります。そして、日本語の音をしっかり理解したことで、世界には様々な異なる言語、異なる文字・発声法があることを、二つのローマ字を比較することで学ぶ機会にもなりました。世界には、英語にも日本語にもない音を持つ外国語がたくさんあります。じゃあ英語にも日本語にもない音もあるのかなと指摘してくれる子供たちもいて。たくさんありますよというお話をすることができました。

研究者の中には、英語のことだけを考えたら、どの種類のローマ字であれ、ローマ字の指導そのものが必要ないと言っている人もいます。私はそこまでは思っておりません。ただ、学校現場は本当に多様化の時代です。学校現場のことは今日の議論の直接の対象ではありませんが、社会の縮図であるという意味では、大いに参考にすべきことがあると思っています。

私自身の体験ですが、海外にルーツのある生徒をたくさん指導してきた中で、Lilyという女の子がいました。漢字で当て字をしたりしてその子は日本語でも自分の名前を書けるのですが、ローマ字で書くときには「ｌ」「ｙ」でつづっていました。ところが、ローマ字を習った生徒たちの中で、いやローマ字にはｌはないから駄目だよなどと言う子がいました。「どうして「ｒ」「ｉ」でつづらないの。」と無邪気に聞くので、そのLilyさんは大変困っていました。ヘボン式ローマ字はそもそも鎖国をやめたとき

にこれから海外の人とつながろうということでできたものなのに、無意識のうちに、心を閉ざしてしまうきっかけになるという例も見てきました。

今からの時代は、このローマ字の歴史も尊重しつつ、何のためにあったか、そして今後は何のためにローマ字が必要となっていくのか、どう扱うべきなのかを、私たち大人が正しく、しかも共通して認識すべき時代が来ています。ある意味で従来の価値観を捨てる勇気を持って、価値観を変えていくくらいのダイナミズムが求められていると考えております。

以上です。長時間お聞きいただきありがとうございました。

○森山主査

山本（玲）委員、ありがとうございました。

ただ今のお話について疑問点や確認しておきたいことなどがあれば伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

（ → 挙手なし。）

それでは、お話を踏まえての意見交換に入りたいと思います。学校において、いわゆる訓令式とヘボン式に出会う時期が場合によってはかなり近くなることがあることをお話しいただきました。そのような中でも、様々な工夫によってローマ字教育は大きな混乱なく行われていると認識しておりますが、一方で山本（玲）委員のお話にあったように、難しさを感じる方がいらっしゃることも理解できました。

常々言っておりますとおり、国語分科会は社会における言葉の交通事故を避けるためにはどうしたらよいかという、その点を検討する場であろうと思っております。そういう点で、今回、山本（玲）委員の御専門に基づき、学校でのお話を伺いましたが、学校での教育そのものやカリキュラムはここで直接に関わることではない点には留意しつつも、社会生活の中で訓令式とヘボン式の間でとまどいを経験する、先ほどの福田さんやLilyさんのような様々な例を受け止めながら、皆様方の御意見を伺っていきたいと思います。

山本（玲）委員がおっしゃっていたように、単純に訓令式又はヘボン式に一本化すれば良いということではなく、両者を共に学び、理解するための考え方といったことを検討されている点は非常に大事なところかと思います。

少し長く感想を申しましたが、お話を踏まえての意見交換に移りたいと思います。いかがでしょうか。

○成川委員

意見というか、質問なんですが、よろしいでしょうか。

機器の入力について、どうしてローマ字入力するのでしょうか。私自身はワープロが出てきて使い始めたとき、既に英文タイプを覚えていたので、平仮名入力を覚えるのが面倒くさくてそうはしませんでした。しかし、平仮名入力であればタイプする文字数は少ないですし、昔は親指シフトなどが一番効率がいいと言ってそれでやっている方がかなりいたと思います。

小学校で一から始めるときにどうして平仮名入力ではなくてローマ字入力をやるのか、そもそもローマ字入力をしましょうと学校で教えているんでしょうか。非効率な感じもします。

○山本（玲）委員

今、ＩＣＴが劇的に進化していく中で、特に若い人、大学生などを見ていると、スマホは親指だけでどんどん日本語入力をしていますから、キーボードを使ってローマ字

入力で打てなくても、ほとんどのことはできてしまう時代が来ているのは事実です。
ただ、今大学で問題になってきているのが、スマホのような日本語入力に慣れてしまっている、そしてローマ字入力が余りできない大学生が今急激に増えてきていることです。

○成川委員
すみません。スマホなどのフリック入力のことではなくて、キーボードの、「Q」のところに「た」、「W」のところに「て」と書いてある、この日本語入力のことでお聞きしました。

○山本（玲）委員
この日本語入力だと、かえって遅くなるのではないでしょうか。私の周りにいる先生方は英語教育や外国語を専門にしている方が多いせいか、日本語入力はかえって時間が掛かるというのが私たちの共通認識です。

○成川委員
タイプする回数が１文字１回で済みますから日本語入力の方が速いとも思われます。

○森山主査
その点、どうでしょう。私も小学校などの様子を見ておりますと平仮名入力を使っている子供たちも確かにいるようですが、後での英語の入力などのときにもう一度勉強し直さないといけないといったこともあって、その辺り議論のあるところかと思います。
その辺りについて長岡委員はいかがお考えでしょうか。

○長岡委員
確かにキーボードで平仮名入力する場合と仮名のフリック入力があるのですが、ほかに実際に文字をペンで書く方法や指書きなど、いろいろな入力方法があって、そこから選択してやりやすいもので入力していくということはあるかと思います。
ただ、後々日本語だけでなく英語の入力もしていくことになるので、ローマ字入力することも技能としては教えていくという仕組みになっているかと思います。

○森山主査
ありがとうございます。川辺委員、現状なども含めて、何かあるでしょうか。

○川辺委員
長岡委員がおっしゃいましたが、例えば１年生であれば、特に平仮名を学んでいる夏休み前までの時期は、仮名入力をしたり、ペンで書いたりするのが現状かと思います。ただし、２年生・３年生とこれからずっとタブレットなどを継続して使っていくことを考えて、２年生ぐらいになるとローマ字入力にシフトしているのが本校や周りの学校での現状です。

○森山主査
ありがとうございます。入力方法の問題について、ほかにいかがでしょうか。
（ → 挙手なし。）
子供たちの現状はいろいろありますが、後のことを考えるということで、ローマ字

入力を身に付けさせるのも大事なことではないかというお話だったかと思います。
それでは、ほかに何かございますか。

○古田委員
山本（玲）委員、非常に貴重なお話をありがとうございました。
教育現場の具体例や検証授業などのデータを豊富にお示しいただきながら、２種類のローマ字のつづり方が併存することの問題、特に国語教育と英語教育の連携にまつわる問題点や、名前の表記という非常にセンシティブな事柄に関する御指摘もあり、幾つもの重要な課題を整理された形で御提示いただき、論点が明確になりました。大変有り難いヒアリングだったと思います。
ヘボン式のデメリットを考えるときに、不規則性や複雑さがよく挙げられ、訓令式の規則性と対比されると思います。今回御紹介くださった教材をはじめ、教え方によってはカバーできる程度のデメリットだという調査結果があるのは重要なことだと思いますので、その点も非常に勉強になりました。
もう一点ですが、ほかの主立ったヘボン式のデメリットと言いますか、仮にヘボン式に統一するとした場合の懸念として、昨年来この国語課題小委員会でも話に出ている点があります。それは、英語の発音に寄り過ぎてしまうというか、グローバルというよりも英語という特定の言語を偏重してしまうことになりかねないという点です。これに関して、今回のヒアリングの最後の方で、二つのローマ字を学ぶことを通して世界には様々な言語があることを学ぶことができたという点が挙げられていました。
そこで一つお聞きしたいことがあります。今のような点は重要な御指摘だと思うのですが、例えばヘボン式と訓令式、その二つの体系全体を学ばなくても、そういった気付き―世界には様々な言語があって様々な発音の仕方があってといったことを学ぶのは可能であるようにも思われます。幾つかの限られた、例えば「チ」など特徴的に違いが出る文字や言葉について、ラテン語的な読み方や、あるいはフランス語的な読み方など、幾つか例を挙げて、ヘボン式ローマ字の方式ではこういうつづりになるけれど、ほかにこういうつづりもあってというように教えるという方法もあるかとお聞きしながら思いました。その点について何か御所見があればお伺いしたいと思います。

○山本（玲）委員
おっしゃったとおり、今日紹介したのが唯一無二の方法ということではなく、いろいろなアプローチがあると思います。ただ、ローマ字があるせいで日本語も英語も混乱しているといったように、悪いように捉えられがちなので、むしろそれをメリットに変える視点もあることを紹介させていただきました。
それから、英語に偏り過ぎるのではないかという懸念ですが、ローマ字で名前を表記するということは、英語に限らずどの外国語を使う方もローマ字を使って表記され、それで日本の駅の名前などを読まれます。ローマ字で書いてあるものの発音の仕方は国によって異なる発音をされることもあります。そういう意味で、ローマ字は非常にグローバルに使える、非常に役に立つ、どの国の方が来られても読み取ることができるという汎用性を持っていると思います。

○古田委員
ありがとうございました。

○森山主査
ほかにいかがでしょうか。

○山本（真）委員

非常に貴重なお話を頂き、どうもありがとうございました。どういったところに問題の所在があるか、それを多角的に分析なさり、提言まで頂くという非常に明解なお話でした。いろいろお尋ねしたいのですが、時間も限られているので簡単に申し上げます。先ほどの森山主査のお話にあった、教育ということは直接の対象にならないが、国民の社会生活に混乱が生じないように現状を知っておくという点に関連してです。

大学で授業を行っていて、日本語学の入門や概論で、「７時」をローマ字で書いてみなさいというようにして、導入をしてみることがあります。正確なデータを取っているわけではないのですが、ここ五、六年ぐらいで、およそ７割ぐらいがいわゆるヘボン式でつづって、１割か１割にも満たないぐらいが訓令式でつづります。そのほかは「シ」と「チ」は訓令式だけれど「ジ」だけヘボン式といったような交ぜ書きでつづっている、という傾向が、ここ数年大体同じような割合で推移しているという印象です。

今日の山本（玲）委員のお話で言えば、2012 年から、小学３年生で訓令式、５年生でヘボン式を学んできたような時代に育った児童が今、大学生になっています。今申し上げた印象というのは、山本（玲）委員の大体予想どおりなのか、それとも予想外なのかお教えいただければと思います。

○山本（玲）委員

ありがとうございます。今の大学生は英語に取り囲まれて生きていますし、毎日いろいろなものに取り囲まれて生きている中で、どちらかというとヘボン式に近いローマ字を自分でも確立していく傾向があると思います。また、先ほど紹介したように、保護者もそういう方向へ引っ張ろうとしているような流れの中で、驚かない結果ですし、ヘボン式を使う割合は、今後何もしなければどんどん増えていくことは間違いないと思います。

○山本（真）委員

ありがとうございました。

○森山主査

ほかにいかがでしょうか。

○木村委員

大変貴重なお話でとても勉強になりました。ありがとうございます。

まず感想です。ローマ字表で入力方法を見せた後に、そのうち自己流で入力させることが多いとのことですが、どのような入力を行っているのかということに関心を持ちました。

そこで教えていただきたいのは、音と文字の指導によって習得が高まったというお話でしたが、キーボードの入力方法の変化もあったのでしょうか。

○山本（玲）委員

その点は調査していないので分かりませんが、先ほどから委員の皆様の御意見があったとおり、ローマ字入力だけではなく、日本語入力やそれ以外にもいろいろな入力方法があります。不勉強で、基本的にはローマ字を使って入力させているのだと思っていたら、そうでなく、最初日本語入力をさせている小学校もあることを先ほどお聞きしました。まだまだ私自身も分かっていないところがありましたので、入力方法に関してはもっと調査をしていく必要もあるかと反省しているところです。

○木村委員
　ありがとうございます。大人になっていくとき入力方法が意識に影響を与えているのかなどといったことを考えた次第です。

○森山主査
　ほかにいかがでしょうか。

○村上委員
　非常に分かりやすいお話で、今のローマ字の課題がよく分かりました。ありがとうございます。
　感想を含め、一つお尋ねしたいことがあります。私は日本文藝家協会に所属していて、言わば物書きの端くれとしての話です。例えば日本文学が世界に発信していく上で、英語が事実上のスタンダードになっていますので、英訳がないと世界に発信できないということがあります。そういった意味で、ヘボン式を子供たちが学ぶことは非常に重要なことだと思います。
　山本（玲）委員の話の中で、余り厳密に考えずに、言わば使えるローマ字教育、あるいは実際に生活する人々にとって使いやすいローマ字の在り方が望ましいという話をされたと思います。
　技能実習生という人たちがいます。その人たちは先進国というよりも途上国から来る人たち、いわば貧しい国から来る人たちの方が多くて、これからますます増えていくと思います。日本の人口が減っていく、労働人口も減っていく、そうした中で、技能実習生を受け入れていかざるを得ません。この人たちは短時間ですが日本語を学んで来日します。そういう人々にとってヘボン式がいいのか、訓令式がいいのか、どちらが使いやすいものになるのか伺いたいと思いました。

○山本（玲）委員
　先ほど紹介したLilyさんは英語圏ではなく、そういう途上国から来た子供でした。私の今勤めている大学にもそういった大変なバックグラウンドを持って日本に数年前に渡ってきた人の子供といった人が結構入学してきています。日本語も余り上手ではないそういう学生たちと話をしていると、その学生たちは日本語を学ぶために、身の回りにある駅の名前といったものを一生懸命口に出して読んだりして練習しています。例えば京都駅の駅名を見て「キョート」と日本語らしく発音する練習をしたりしています。そこに書いてある文字はほとんどがヘボン式で書いてあります。実社会の中で訓令式で書いてあるものはほとんどないので、そういう意味では、生徒たちが日頃の日常生活の中で目にできるヘボン式の文字、それと耳にする日本語の音を同一化させていく作業が、そういった形で来ている外国の人たちにも有効だと思います。

○村上委員
　ありがとうございました。

○森山主査
　ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。
（ → 挙手なし。）
　山本（玲）委員のお話にもありましたが、丹波町の「ン」の書き方をどうするかという話もありました。私もこちらへ来る時に見たのですが、地下鉄では「ニホンバシ」の「ン」が「ｍ」と書いてありました。しかし、「ニホン・バシ」という構造を分かりやすくするには「ｎ」の方がいいわけです。そういう点で、分かりやすいヘボン式の在り

方も考えるべきだという御意見に賛成です。
　そのように考えていくと、具体的に長音をどうするかといった辺りの問題が結構難しくなってくると思います。例えば私の知り合いで「オタ」さんという方と「オオタ」さんという方がいます。「オオ」の部分、長音をどのように表記すればいいかといったことについて、もしお考えがあれば伺いたいと思います。

○山本（玲）委員
　そのことはずっと考え続けてきましたが、いい方法が思い付かないのが現実です。先ほどの話に入れていたように、「Ota」とつづって外国の方のような発音をすれば「オオタ」さんも「オタ」さんも違いはなくなります。私の同僚の英語がお上手な先生で河野先生という方がいます。「Kono」とつづると「コノ」と呼ばれてしまうので、どこに行くときも「Kouno」とつづっています。それはローマ字としては余り正しいつづり方ではないと思いますが、これしかないとその方はおっしゃって、それで通しています。
　こうしたことは多分全国で起きていて、先ほどのゆうき君のことなども、ゆきと女の子に間違えられるのは一生続くことだと思うので、「Yuuki」と、仮名のとおりに「ｕ」の文字を入れるといったルールがまだ現実的かと個人的には感じています。

○森山主査
　ありがとうございます。その辺り、例えばオオタさんの場合は平仮名で書くときは「おお」になるのに対して、王様の「王」の場合には「おう」となるといった平仮名との関連性の問題もあります。また長音符号そのものの様々な工夫の仕方はこれからの議論というところかと思います。日本語を示すのがローマ字であるとすれば、長音という日本語の韻律的な特徴に合わせた表記法はどこかで考えておく必要はあるかという感想は持っております。

○山本（玲）委員
　一番問題になるのは特に個人の名前だと思います。名前は本人が申請したつづりは何でも認めてもらうといったことになれば本当は理想的なのかと思います。出生届の時に読めないような漢字の当て字の名前でも認められることはあると思いますが、本人及び保護者がこういうつづりにしますと言えば、よほど読みにくい名前のとき以外は認めてあげるといった柔軟性があると理想としてはいいと思います。

○森山主査
　ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○川瀬委員
　山本（玲）委員、ありがとうございました。学校の先生は本当に大変だなと思って伺っていました。
　今、私たちがやろうとしている、ローマ字の事故を少しでも減らすためにどうしたらいいかということを考えると、どちらかに統一するなり、新しい枠組みを作るなりしないと、ずっとこのローマ字の事故は続いていくのではないかという気がしてきました。
　最近、大谷翔平選手をどうローマ字で書くだろうと、背中にどう入っていたかと気になっています。「oo」と「ｏ」を二つにするのか、「ou」にするのか、「oh」にするのか、「ｏ」一つにするのか、周りの人に書いてみてもらったんですが、ばらばらなんです。
　訓令式があり、ヘボン式があり、しかも小さな時から英語教育が始まっていて、また

情報機器を使う中で、変換できるからどれでもいいよという教わり方をしてきた人たちは、この問題はずっと引きずるだろうという気がします。

固有名詞である人の名前、場所の名前といったものを好きなように、申請どおりに受けていただければいいのですが、結果的にそれがルールに合っていないから整合性がないと見られてしまうことも、今、多々起きているわけです。それを考えると、学校教育が対象でないことは重々分かっていますが、本当に大掛かりなことをやっていかないとローマ字の事故は防げないでしょうし、誰もが納得して使えるローマ字はもしかしたら難しいのではないかという気がしました。

まとまらない話で恐縮ですが、以上です。

○山本（玲）委員

ありがとうございます。おっしゃるとおり、新しい三つ目のローマ字つづりを作るのはありかもしれないですね。

○森山主査

本当に日本人が使いやすいローマ字のシステムはどういうものかをこれから考えていくことは大切かと思います。そういう点について、斎藤委員いかがでしょうか。

○斎藤委員

今あるシステムを使い続けようとするために、いろいろあちこちで問題が起こっていると思います。そこで、音の対立という面からローマ字のシステムを新しく考え直す必要があると思っています。

音の組合せは、以前はできなかったものが今は当たり前にできているということがあります。先ほどの発表資料にもチキンを「ti」で書くのは耐えられないといったことがありました。恐らく以前なら自然に受け入れられたのだと思います。今は「ティ」という、子音「ｔ」と母音「ｉ」の組合せを簡単に発音できるようになっているので、そういったことが起こるのではないかと思います。

そこで、以前の時代に考えられたものから少し離れて、現在の日本語の音の対立といった点から整理して考えると、比較的うまくいくものができるのではないかと個人的には思っています。

もう一つ、丹波町のお話がありました。「ン」について、日本語ではその部分がどういう鼻音であるかの違いによって意味を区別していません。「タンバチョウ」はさっと発音すれば、後ろが両唇の子音ですからそれに影響されて両唇の鼻音（m）が出てくる可能性が高いですが、少しゆっくり発音するとそうはならないんです。必ずその音になるということではなくて、後ろの音と続けて発音されるとそうなりがちだということであって、ゆっくり話せばそうはなりません。そのため、子供が書くときなどは難しい点なのではないかと想像します。

繰り返しになりますが、現在の日本語での母音と子音の組合せ、可能な母音と子音の組合せ、そういった点を整理して考えていくと、比較的問題の少ないシステムができるのではないかと考えています。

○山本（玲）委員

ありがとうございます。

○森山主査

ありがとうございます。そういう点で、Lily さんのお話もありましたが、例えばサティーさんという人の場合ですと、「ティ」が日本語の音韻の中には外来音としてはも

う定着していますが、ローマ字では書きようがありません。そういった外来語を書くときにどのようにローマ字と共存させていくのかという問題などもあるかと思います。その辺りいかがでしょうか。

○斎藤委員

Lily さんの例ですが、先ほどのお話だと、ローマ字化した日本語と元の言語での表記の仕方とが混同されているのではないかと思います。日本語の中における「リリー」さんは、r で「Rirî」のように書かれるべきだと思いますが、元の言語でつづられている文字で書くのは、日本語でいえば漢字仮名交じりの文の中に外国語の単語をローマ字で入れたようなものかと思います。元の言語での表記の仕方と日本語でのローマ字化は別の次元かと思いました。

○森山主査

ありがとうございます。おっしゃるとおり、ローマ字は日本語のものですから、ローマ字のシステムとしてはそうだと思いますが、ローマ字の運用としては、外国のそういう言葉を日本語に直してローマ字化する場合と、そのままアルファベットで入れていく場合など、様々な実際の運用の仕方が考えられるかと思います。その辺りも考えていかなければならない問題かと思って伺った次第です。その点について山本（玲）委員はいかがでしょうか。

○山本（玲）委員

おっしゃるとおりだと思います。ローマ字が万能だといったような従来の考え方によって教えられている子供たちが、今おっしゃったようなことを全然納得してくれないことをお伝えしたかっただけで、これから指導をきちんとしていくようになれば、そういう問題は解決されると思います。

○森山主査

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○滝浦副主査

山本（玲）委員、ありがとうございました。お話を伺いまして、感じたことがあります。

生徒たちに説明をされたときに、訓令式とヘボン式は目的が違うというお話でした。私はこれが非常に大事なのではないかと思います。訓令式は合理性はありますが、それは日本語の五十音図が非常に合理的だと言っているのと同じ次元での合理性であるわけです。その合理性は逆に、その中に含まれている発音上の細かな差異のようなものはむしろ現れない形で書かれることになります。その部分が後で―今は同時にかもしれませんが―英語などをやっていくときにはむしろ障害になって混乱を来すことがあるということかと思います。そういう意味ではヘボン式の方が英語に対する親和性は高いので、英語学習との相性はいいということになるかと思います。

それはどちらが優れているということではなく、目的が違うということをきちんと言えば子供たちも分かってくれます。恐らく大人もある程度分かってくれるだろうと思います。

一方で、先ほどの、後ろが両唇音であるときに前の「ン」が「m」になるといった、ヘボン式で過剰に音声主義的というのか、ある部分だけむやみに細かいところがありますが、言ってみればそれは要らないわけです。そういったところを整理していくのは、この機会に一つやってもいいことなのかと思います。

もちろん理想的な第三のローマ字体系を提案するという非常に志の高い道もあるかとは思いますが、現状どうなっているかということを私たちは無視するわけにはいかないだろうというところがあります。現状を調査して、現状とうまく折り合いを付けて、考えていくということかと思います。英語だけに寄っているという指摘は確かにそのとおりですが、世の中で英語がほかの言語と違う特権的な位置を得ていることもまた事実だということもあります。その辺りのバランスを考えていく意味で大変興味深く拝聴した次第です。ありがとうございました。

○森山主査

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

○成川委員

手短に話します。「ｍ」と「ｎ」の書き分けは要らないのではないかというお話が多かったのですが、タイ人の、音の種類が多い言葉を使っている知り合いによると、平仮名表記は音の違いをそこにまとめて押し込めているので、平仮名では分からないということです。「ｍ」と「ｎ」と鼻濁音、それによって全く意味が違う、短母音、長母音があって、それによって全く意味が異なる言葉を母語とする人にとっては、少しでも違いの取っ掛かりが欲しいそうです。日本語の表記は音の違いの区別が付かないということです。短母音／長母音で意味が異なる人たちにとっては違和感があるということなので、できれば日本人にとっては自然に発音するので意味がないというところでも、区別が必要ではないかと感じています。これは、目的は何なのか、誰のためのものなのかというところを考えないといけないのではないかと思っています。

○山本（玲）委員

発音記号と一緒で、曖昧なところを残さなければ難しい問題だと思います。理想的には「ｍ」とすべきだけれど、それをしない人がいても許容されるような。確かに今おっしゃったとおり、外国の方で日本語を学ぶ方にとってはまた違うところが大事になってくることということは納得できたので、これだけが唯一無二の新しいルールだというのではなく、ここはできなくても別にいいけれどといったものと、必須のものとが共存できるような曖昧さを残す方法があればいいなと、楽観的ですが感じました。

○滝浦副主査

すみません、少しだけ今の点について話します。

成川委員のおっしゃったことはよく分かりますが、「ｍ」が余計だというのは、「ｍ」をもし残すのであれば、「ng」もないとおかしいということです。「ｍ」があり「ｎ」があり「ng」があれば体系として必要な区別となるところだと思いますが、「ｍ」だけがあって、「ｍ」よりもむしろ「ng」があってもいいのではないかといったところのバランスで、どうも具合が悪いと思います。それなら、違いはなくなってしまうけれど、「ｎ」一つでやるということにしたらいいのではないか、そういう趣旨で申し上げました。

○森山主査

ありがとうございました。ローマ字のつづり方に関して、これから検討していくことになるかと思いますが、様々な問題をしっかり取り上げて、最善のものは何かということを考えてまいりたいと思います。

山本（玲）委員には改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

それでは続きまして、今後検討すべき課題全般に関する調査等について意見交換をしていただこうと思います。今期の国語課題小委員会はローマ字のつづり方に関する検討を中心に審議を進めることになっていますが、その議論に合わせて、国語分科会で取り組むことが想定される課題についての実態調査を進めることとなっています。前回の小委員会では、今年度中にローマ字のつづり方と外来語の表記の二つについて調査を行うために文化庁で予算を確保していると伺いました。

このうち外来語の調査については、事務局で内容を検討し、準備がかなり進んでいると伺っています。本日は、事務局で検討されている調査の対象・方法などについてここで共有していただき、委員の皆さんから質問や御意見を頂こうと思います。そして、調査に反映できることがあれば反映していただきたいと思っています。それでは配布資料３「外来語の表記に関する実態調査の概要（案）」と、それに関連して参考資料２「国語分科会漢字小委員会への提供資料（独立行政法人国立国語研究所）（平成 20 年 9 月 22 日 漢字小委員会 資料 4）」について、事務局から説明をお願いします。

○武田主任国語調査官

それでは配布資料３を御覧ください。森山主査の御説明のとおり、外来語の表記に関して、今年度中に行う調査の、今考えている概要をお示ししています。これは、事務局だけでなく、委員の方々にもいろいろ御相談しながら検討したものです。

まず調査の目的についてです。国語分科会で、今のローマ字に関する検討の後、場合によっては外来語の表記に取り組むといったことが昨年度取りまとめられています。そこで、特に「外来語の表記」（平成３年内閣告示第１号）に取り上げられていない新たな外来語の表記が定着しているかどうかを中心に調査することになるかと思います。それとともに、外来語をどう書くかという問題についてその実態をできるだけ広く捉えたいと考えています。

ⅠからⅣまで調査対象を示しました。Ⅰは、日経 500 選定銘柄という例を挙げておりますが、各企業が示した報道発表、プレスリリース、ニュースリリースというような形でウェブサイトに上がっているものをできるだけ広範に集めて分析します。Ⅱは、国の各府省庁が作った白書を 20 冊程度、Ⅲは、大学等研究機関の学術論文を 200 本程度、分野のバランスを取って調べることを考えています。このⅠからⅢまでは、いわゆる官・民・学といったそれぞれの分野での比較的新しい材料について、特に企業のニュースリリースなどには新製品の話ですとか、新しいテクノロジーの話といったものがありますので、その中で外来語がどのように使われているかを把握したいと思っています。Ⅳは、英米以外の言葉について捉えることを目的として考えています。人名・地名・品名の表記について、いろいろな例を挙げていますが、それをできれば５万語程度集めて分析したいと思っています。

このⅠからⅣのいずれについても、資料の一番下の①から③に書いてあるようなことをしたいと思っています。①語ごと（表記ごと）の頻度数を集計する、②「外来語の表記」が取り上げていない表記があればそれを抽出する、③同じ外国語に基づく外来語でありながら表記の揺れが見られるもの、例えば「エレベーター／エレベータ」「パーティション／パーテーション」といったものを抽出する、そうしたことを考えております。

これが現在事務局で考えている概要です。幾つかの調査会社などにもどのようなことができるかを相談しながら、また研究者の方にもお話を聞きながら考えている段階のものです。

続いて参考資料２を御覧ください。外来語の調査を行うということで、どのような資料を対象として、そのうちのどの辺りを扱うのかといったことを―委託して調査を行うことになっているので―今後、委託先としっかり詰めていかなくてはなりません。今、ChatＧＰＴのようなものが話題になっていて、比較的言葉に関するデータを集めたりすることが容易になっているかのような印象がありますが、こういった調査においては、安心して使えるようなデータが必要になってくることを改めて感じています。

そうしたことを考えながら調査の内容を考えていたとき、ちょうど前回の国語分科会の中で浜田分科会長から、最近話題になっている生成ＡＩについて、社会の変化の中で生じている課題の一つであり、国語分科会で言葉の問題を考えていく上で大きな一石を投じられているのではないかという御発言がありました。

また、同じ日の国語小委員会の中でも森山主査から、新しいＡＩ時代の言葉に関する施策として、例えば国立国語研究所が行ったコーパスの取組などを例にして、多くの人が安心して頼りにできるような言語資源を共有していく必要があるのではないかといったお話もあったかと思います。

そこで今回、外来語の表記に関する調査について説明するに当たり、15年以上前のものになりますが、常用漢字表を改定しているときに国立国語研究所が協力してくださった調査の結果を、参考資料２としてお示ししました。

こちらは国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（ＢＣＣＷＪ）を活用した調査です。ウェブサイトでは「少納言」という検索システムがあって、そこでこちらを誰でも使えるようになっています。コーパスというのは簡単に言うと自然言語の姿を集めたデータベースです。そして、この国立国語研究所のコーパスは平成23年に公開されたものですので、今回お示しした参考資料２はそのコーパスの構築中に特別に調査を引き受けてくださった資料だったということになります。

この国立国語研究所のコーパスは書き言葉を対象にして、統計学的にバランスの取れた対象を集め、また著作権に関する処理なども全て施され、さらに文法的な分析まで付されているものです。専門家の目が通された非常に信頼の置ける優れたデータベースであると言えます。こういったものがあれば、いろいろな調査などに今後活用ができるということがあり、今、実際に多くの研究者や企業、辞書の編纂などにおいて、このコーパスが頼りにされている現状があります。

このコーパスについて、この場でわざわざ取り上げた理由について御説明します。一つは今回の外来語の調査でこれを使えるかというと、残念ながら使えないということになります。外来語の検討には、最新のデータが必要ですが、これは平成23年に公開されたもので、データがそれより前のものになるわけです。例えばこのＢＣＣＷＪを見ると、「スマートフォン」が２例ありましたが、「スマホ」という言葉は一例もありません。また、当然かもしれませんが「ＳＤＧｓ」という言葉も出てきません。外来語の検討ということになると最新の言葉を集めなくてはならないので、せっかく信頼できるコーパスがあるのですが、現状ではこういった調査に使えないといったことになります。

国立国語研究所のコーパスを一つの例として御紹介しましたが、今後も新たな課題に取り組んでいくことになりましたら、当然調査が必要ということになります。今回は調査のための予算を確保できましたが、これから先も、いざというときに活用するための信頼の置けるデータをどうやって確保していくかが一つの課題になっていると

いうことを、外来語の調査に関連してお話しいたしました。
長くなりましたが、以上です。

○森山主査
ありがとうございます。
ただ今の御説明のうち、参考資料２については後ほど取り上げることとし、まずは配布資料３「外来語の表記に関する実態調査の概要（案）」の内容に基づき、調査の内容に関しての疑問点、あるいは確認しておきたいこと、御意見など、自由に御発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○古田委員
一点少し気になった点があります。このＩからⅣで挙げられている中に、新聞、あるいはウェブ上のニュースサイトなどの記事や見出し、そこに出てくる外来語や片仮名語を調べるというようなことはないのでしょうか。それこそ市民生活で、ある意味では最も重要な片仮名語の需要について見られる、あるいは表記の揺れも含めて混乱、交通事故が生じる大きな場所であるように思います。この点に関していかがでしょうか。

○武田主任国語調査官
事務局からお答えいたします。
実はそういったものも検討の対象にあったのですが、今回は落としてあります。特にマスメディア、新聞あるいは放送などでの言葉については、校閲が入って、用語の統一が図られている可能性があるということで、一旦除いています。
ただ、今回の調査が最後になるとは考えておりませんので、必要に応じて今後検討したいと思っています。今回の予算の範囲で、これまで余り調べていないようなところをなるべく調査してみたいということで、このようになっています。

○古田委員
ありがとうございます。お考えはよく理解いたしました。確かに新聞などのメディアであれば校閲が入って統一はされていると思いますが、各種ウェブサイト、ニュースサイト、例えばＩＴ系あるいは医療系といった、独立した情報発信を行っているところもいろいろあると思います。そこは新聞などとは違う可能性もありますし、実際に違うものも幾つか見掛けているように思います。今後もし更に調査を拡充するといったことがあれば、検討していただければと思います。

○武田主任国語調査官
ありがとうございます。

○森山主査
ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

○成川委員
今、新聞について話が出ましたので、どのようになっているか少しお示ししたいと思います。
例えばオリンピックの時の選手名簿は各国のものを全員分作ります。以前はそれを人の作業でやっていました。ところが、確かＮＨＫが最初にやったと思いますが、組織

委員会から来る英語の資料を言語別に自動的に片仮名に換えてしまうようなシステムを作って、処理しています。多分ＮＨＫが一番精緻にやっていらっしゃるのではないかと思いますが、基となる仕組みについて教えてくれるかもしれません。そうすると、一々出てきた人の名前全部ではなくて、この言語についてはこのように処理するといった傾向が見られるのではないかと思います。

○森山主査
貴重な情報をありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○川瀬委員
先ほどのマスメディアの件、校閲が入っていて統一していても、何かの御参考になるのではないかとは思います。言葉にこだわりのある人たちが、ああだこうだ言いながら各社で考えているものなので、参考にしていただける分には役に立つのではないかと思います。

もう一つ、業界団体の統一用語集のようなもので、この機械のこの部品はこのように呼んで、こういう片仮名で書いていますというものが業界団体ごとにあるはずですので、そういったものも多少は関係してくるかと思います。逆にプレスリリース、ニュースリリースから外来語を拾ってくるというと、最初にどの程度網の目を大きくしておくか、小さくしておくかということはあると思いますが、新しいけれども比較的浅い情報が膨大に集まってくるような気がします。ある程度考察がなされているものも大いに参考にしていただきたいと思います。

○森山主査
ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

（ → 挙手なし。）

様々なお話を頂きましたが、調査に盛り込める部分がいろいろあると思いますので、是非生かしていただければと思います。もう一つ予定されておりますローマ字のつづり方の調査については、次回以降の国語課題小委員会の中で改めて詳しく相談させていただきたいと思います。

続きまして、参考資料２を取り上げたいと思います。こちらは常用漢字表の改定の際に、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（ＢＣＣＷＪ）の準備段階の資料を提供いただいたということでありました。今回の外来語調査の趣旨においては、扱われているデータが最新のものではないということで使えませんが、最新のデータを集めて、そういう信頼度の高い言語資源としてのデータベースが整備されていかなければならないのではないかというお話であったと思います。

一方、前回の国語課題小委員会の中でも、ChatＧＰＴなどいわゆる生成ＡＩが非常に世の中を席巻しつつあって、その活用の在り方などについても議論が必要だと言われています。そういったことを含めて、改めてデータの信頼性や、著作権、知的財産権などの問題も指摘されているところだと思います。

文化庁では今期のうちにローマ字のつづり方に関する実態調査も実施することになっています。今回は調査のための予算も確保できたということで安堵（ど）しているものの、今後国語に関する課題の検討を進めていくに当たっては、安心して頼ることのできる言語データがどのようにあるのか、それをどのように安定的に確保していくのかということも視野に入れておく必要があろうかと思います。

少し話が大きくなってしまいますが、これからの国語施策を考える上で、国立国語研究所は研究機関ですので、研究としてのそういったコーパスと、それから社会の中

で実際にみんなが使っていける、信頼の置ける言語資源としてのコーパスなどの整備は非常に重要な課題ではないかと思っております。

その辺りについて、言語コーパスによる研究や、これからの、あるいは現在既にお使いかもしれませんが、生成ＡＩ等の活用などで何か課題と感じられていることがあれば御意見を頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。

○滝浦副主査

今御指摘いただいた、また、その前に武田主任国語調査官から説明いただいた件、なるほどと思いました。今回外来語の表記に関しても、ローマ字に関しても、きちんとした実態調査をして、その上で策定していこうという話に当然なります。予算も取れて、それも進んでいるというお話もありました。

一方で、昨年いらっしゃった委員の方は御記憶かと思いますが、調査をするのは分かるし、それはいいと思うけれど、一体何を調査するのかという御質問というか御指摘が何回かありました。それに答えられるかというと、答えるのが難しい。何を調査するかという、調査をするための項目などをどう設定したらよいかが分かるような予備調査のようなものができるかというと、なかなかできない。調査をしなければいけないことは分かるけれど、どういう調査をしたらいいかという途中の段階がうまいこと作れないので、そこが悩ましいというお答えが出てくるわけです。

そういったことと先ほどの森山主査の御意見などを考えたときに、完成前のＢＣＣＷＪ―国語研究所がいろいろと作ってくださっているコーパスの中で一番有名なものと言っていいと思いますが―それができる前の段階で、調査をしてデータをくれたことがあったということは非常に印象深いです。

一方で、今私たちがやりたい調査にそのＢＣＣＷＪが使えるかというと、武田主任国語調査官のお話にあったように使えないんです。データとして 1976 年ないし 86 年から、たしか 2005 年までの日本語が対象になっていて、2005 年というと新しいように思いますが、十数年前なので少し古いということになります。私たち研究者でもＢＣＣＷＪでは、最近のものなどは全く用例が拾えないということがあります。それ以降に作られたコーパスもウェブコーパスというようなものはあるのですが、そちらはざっと大まかに作ったようなところがあって、質としてはＢＣＣＷＪは圧倒的に高いんです。

そういうことを考えると、やはり国レベルで、そのＢＣＣＷＪのようなコーパスを非常に大事な言語資源と考えて、どんどん更新していくといったことができれば、こういう審議会などにおいても非常に有り難いのではないかと思います。

ChatＧＰＴについても前回、森山主査のお話にもありましたが、いずれ話題にしないといけないし、それは思っているより早いのかもしれません。そういういろいろな観点で言語資源ということを私たちもきちんと考えていかないと、調査するといってもじゃあどうするんだということがまとまりません。もう少し体系的、戦略的に考えていけたらいいというようなことを思いました。

○森山主査

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

（ → 挙手なし。）

今期はローマ字のつづり方に関する検討を中心に進めていくということですが、こうした新たに国語に関わるような社会的話題が生じてくる場合には、そのようなことにも留意して、本日のように意見交換をする機会を持ちたいと思っております。

また、来年度から日本語教育担当が文部科学省に移管されるということで、事務局の体制も変わると伺っています。国語分科会での審議とは別に、今後の国語施策にお

いて文化庁として新たに取り組むべきことがあれば、一緒に知恵を絞りたいとも思っております。例えば今話題にしていただいたような、日本語の姿をしっかりと捉えて残していくような様々なコーパスの更新といったことも非常に重要ですし、言語政策的に考えていくべき問題もまだまだ多くあると思います。そういったことが国、そして文化庁に期待される課題の一つになるのではないかと思います。

本日の議論に引き続き、社会の動きを踏まえながら、誰もが安心、信頼して使用することができる言語資源の在り方ということで、今後も考えてまいりたいと思っております。言語コーパスに詳しい方からお話を伺う機会なども、これから機会があれば作っていければいいとも思っておりますので、また御相談させていただきたいと思います。

そろそろ時間ではありますが、ほかに御意見などありましたら、いかがでしょうか。

（ → 挙手なし。）

それでは、本日の協議は以上で終わりにしたいと思います。今回ヒアリングのためにお話しくださいました山本（玲）委員、本当にありがとうございました。改めてお礼を申し上げます。

本日もオンラインでの開催でありましたが、無事に終えることができました。心からお礼を申し上げます。

それでは本日の国語課題小委員会はこれで閉会といたします。どうもありがとうございました。